

ゆるい素粒子論グループ

橋本幸士（京大理）

『素粒子論研究』の創刊75周年をお喜び申し上げます。私は2015年より編集委員と編集長をさせていただいております。編集長着任当時は、この雑誌を盛り上げたいという思いで、さまざまな方向性を探り着手しました。そのうちいくつかは進み、いくつかは消え去りましたが、それらを振り返ることで、前編集長からの寄稿文とさせていただきます。

2015年当時の私の危惧は、素粒子論研究は歴史の遺物であり、新刊号はもう必要とされていないだろうということでした。投稿される文章は年に10に足らず、研究会報告や論文もほとんどありません。それもそのはず、情報交換の場が2000年ごろからネットに移ったにもかかわらず、『素粒子論研究』電子版は単に冊子体を電子化しただけのもの、としか言えなかったからです。電子媒体ならではの活用方法が、実装されていませんでした。

そこで私は編集長として、ある年の素粒子論懇談会で、素粒子論研究のホーム

ページにチャットや SNS 的な機能を持たせ、そこで若い人たちも含めて意見を言い合って交流できるように刷新してはどうかとの提案をしました。しかし、素粒子論懇談会であがった意見は、「その必要はない」との冷ややかなものでした。つまり、この媒体は新しいものをする場所ではなく、今までの活動を維持するだけでよい、とのグループのお達しだったのです。

私は心底がっかりしました。それは、この媒体を皆が楽しめるものに育てたいとの私なりの思いが空回りしてしまったからでしょう。それに、そもそも素粒子論懇談会は、一人でも否定的な意見があれば可決できない組織ですから、仕方ありません。この「後ろ向きな組織」にはがっかりさせられることが多かったものです。

その後、従来の『素粒子論研究』から逸脱しない程度に、編集委員会内部での努力が始まりました。原稿を依頼したり、修士論文や博士論文を集めたり、などです。これらは、編集委員の皆さまの尽力で、ある程度の成功を見ました。しかし、定着したり拡大するには至っていない、というのが現状だと思います。

『素粒子論研究』をどうしていけば良いのか、という問への私の答えは、現時点では見つかっていません。75周年という言葉はとても重く、数字が増えるた

びにさらに重くなっていくことでしょう。周年事業は、過去の『素粒子論研究』や素粒子論グループがどうだったか、を若い人たちが知る機会にはなるので、その意味では重要でしょう。しかし、時間の向きとしては、後ろ向きです。素粒子論コミュニティが今後どのようなようになっていくのか、どうしていきたいのか、を議論する場はどこなのでしょう。創刊時は、それは『素粒子論研究』だったのだと思います。しかし、現在、そんな場所は無いのではないのでしょうか。

私は、ゆるいつながりである素粒子論グループが好きです。固く結束するよりも、自由にいろんなアイデアが試せるからです。それが素粒子論の本髄とでもいうものでしょう。一方で、このグループが存在している理由の中には「伝統に根ざしている」という点もあり、それが機関紙『素粒子論研究』の立ち位置なのだろう、と今では納得しています。私が編集長だったときに目指すべきだったのは、伝統ある『素粒子論研究』を変革することではなく、それは保ちながら、新しく他に媒体を立ち上げることだったのだらうと思います。まあ、立ち上げなくても既に SNS で繋がっているゆるいグループがたくさんあるので、それで良いのかもしれません。

これからも、ゆるくて楽しい素粒子論グループであってほしいと思う次第

です。